

観戦記: ねこまど女性将棋大会 初段免状獲得戦

【記】 露峰 航史郎

ゴールデンウィーク初日の 4/26(土)に「ねこまど将棋大会 初段免状戦」があった。この将棋大会は女性のみ参加できるという趣旨であり、何と十二名も参加した。

筆者が子供だった十年ほど前は連盟でレディーススクールが開講していた記憶はあるものの、女性向け大会の数はまだ寂しい時代であった。少なくとも今は昔よりも多少マシな環境になっているのだろうと信じたい。

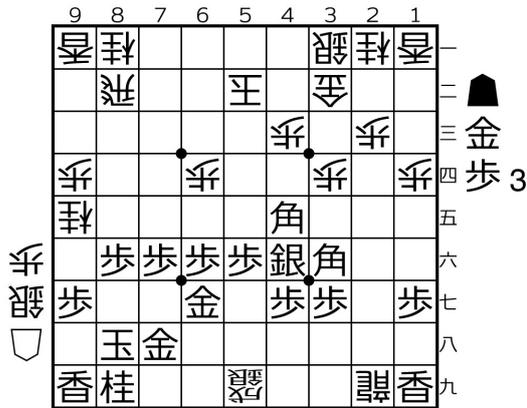
まずは佐藤さんと坏さんの対局から。先手の佐藤さんは三間飛車から石田流に。後手の坏さんは銀冠に構える。下図は上手く佐藤さんが端攻めをいなして少し先手の気分がよい局面。後手はうまく勝負形に持ち込みたいところだ。



ここで△9八香成としたのが先手陣に響きの薄い手であった。すかさず▲6四歩△同銀▲7四歩が振り飛車党の指がしなるさばきだ。後手はわかっているにも銀取りを味良く受ける手が難しい。代えて△9七香成とすべきだった。これならば△8七成香を見せられて先手は焦る。形勢自体は互角であるが、実戦的には先手がかなり焦る展開だろう。厳密には△9六飛車でまだ難しい局面ではあるが、簡単に思いつく手でもない。後手はこうなる前に変化が必要だった。このあとも佐藤さんは粘りを許さずに寄せ切った。

続けて涌田さんと高橋さんの将棋から。二人とも序盤から元気よく飛ばしながら指して、一步も引かない。後手の高橋さんは棒銀から果敢に攻めて、先手の涌田さんはそれを矢倉でしっかり受け止める大乱戦になった。

難しい将棋であったが、終盤で涌田さんにミスが出たせいもあり高橋さんが優勢な局面になっている。



後手は△8 七銀と露骨に打ち込んだが、▲同金□同桂成▲同玉で先手玉がさっぱりしてしまった。桂馬か角がないと先手玉は妙に寄らない。

ここで後手は△3 八竜と引くべきだった。これは△8 七銀からの詰めろを狙っており、▲6 三角成～▲6 四馬の王手飛車が間に合わない。そこで

そこで先手は▲6 八金打と埋めるくらいだが、そこで△4 二玉と早逃げすれば後手が良い。先手は金を手放したとと早逃げの影響で戦力が明らかに足りない。この後は王手飛車で飛車を取り切った涌田さんの勝ちとなった。

そして決勝戦で水無瀬さんと三嶋さんが決勝で激突。三嶋さんは道場で腕を磨いているのに対して、水無瀬さんは自作AIを見て学ぶという異色の経歴を持つ。正反対な背景を持っているところが面白い。戦法にこだわりがないと言う水無瀬さんは居飛車穴熊に、三嶋さんは得意の中飛車に構えた。図は三嶋さんが 5 六歩と抑え込みを図ったところ。ゆっくりしていると△7 二銀から△6 四歩で後手がわかりやすい将棋になる。居飛車側は腕の見せ所だ。





▲3七桂が柔らかな好手で、後手はどこかで▲4五桂と気持ちよく捌かれることをケアしなければいけない。後手としてはどこかで△5二金左を省略して△6四歩や△4六歩動く手を考えたかった。引けない後手はここから△6四歩から動いて決戦となった。三嶋さんが少々無理に動いたのもあり、右桂も捌いた水無瀬さんが優勢になっている。



しかしここで▲6五飛打と重ねたのがまずかった。△6六角▲同飛△2九飛で混戦になった。厳密にはまだ先手が優位を保っているが、角の利きや△5九歩成など気にしなければいけない材料が多い。

変えて攻めるなら▲4一飛、受けるなら▲7七金打か。穴熊は金銀の枚数が三枚あれば相当寄せるのに骨が折れる。そこまでしてから▲5四桂の方がわかりやすかっただろう。以下は三嶋さんが寄せ切った。水無瀬さんにとっては惜しい将棋となった。

三嶋さんは全勝で堂々の優勝を飾る。終盤の切れ味や踏み込みは光るものがあった。経験を積みば三段、四段にはすぐになれる将棋であると思う。

これは三嶋さんのみならず、参加された方々全員に言えることだと思う。筆者が初段の

時は 4 五角戦法や棒銀振り回して暴れる早指し少年だったことを思い出すと、初段のレベルはここ十年で上がってきている。

今回は惜しくも初段免状獲得とならなかった人たちも力のあるいい将棋を繰り広げていた。ぜひともまた将棋を指してほしい。

露峰 航史郎

アマチュア四段。若手将棋ライター、会社員。振り飛車党だが、時々居飛車も指す。三軒茶屋将棋倶楽部出身で、同クラブ出身の最強若手世代らとともに腕を磨いた。学生時代はねこまどこども将棋教室で後進の育成を行った経験がある。